

JA共済連と早稲田大学が共同で開講する寄附講座が7年目に突入
 ～ 本年度は“農”の多面的な機能に注目し、その魅力や可能性を学生たちが考えます ～

2018年4月25日

JA共済連（全国共済農業協同組合連合会）では、早稲田大学と共同で、2012年度より、同大学の学生を対象に講座を提供しています。

本年度は、農業を地域産業という側面だけではなく、その多面的機能に焦点を当てるとともに、これらを育む農山村地域の現状と課題について学ぶ『農と地域社会（総合講座）』講座（春学期・講義型）と、農が有する機能や価値を活用して新たな地方創生や地域連携のモデルについて考える『農からの地方創生（実習）Ⅰ／Ⅱ』講座（春学期／秋学期・実習型）の2科目の講座を4月より開講します（『農からの地方創生（実習）Ⅱ』は9月開講）。

1. 過去の成果と実績

本寄附講座は、2012年の開講以来、これまで約1,900名の早大生が受講しました。

過去6年間では、半期の講義型講座においては農村地域の経済と社会を体系的に学び、また通年の実習型講座では、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県・宮城県・福島県の沿岸部地域を中心に、学生たちが“農”を起点とした新たなまちづくりについて考えました。

特に、後者の実習型講座は、内閣府（平成28年度より農林水産省へ移管）が作成している「食育白書（平成27年度版）」において優良事例として紹介されただけでなく、学生の提言が自治体の震災復興計画に反映されたほか、現地生産者やJAと協議を重ね、学生ならではの視点から厳選した地域色豊かな農畜産物を都市部住民に紹介・販売する『東北まるしえ』イベントを実施するなど、大学の授業の枠を超えた活動を展開してきました。

7年目を迎えた本年度は講座内容をリニューアルし、“農”の産業的側面だけでなく、多面的な機能・価値について考察し、その魅力や可能性を引き出します。

2. 2018年の講義内容

農と地域社会（総合講座）	
期間・規模	2018年4月～2018年9月 [春学期] ・定員300名程度
講座統括責任者	早田 幸(早稲田大学 社会科学総合学術院 教授)
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近年、農産物の産地や日本の農山漁村に興味を持つ学生は少なくない。しかし、高齢化や人口減少、グローバル化による影響等から厳しさを増す日本の農業・農村を「自分ごと」として捉えることは難しい状況にある。 ・ 本講義では、自分の生活と農業の距離感を測ることからはじめ、日本の農業・農村の歴史や現状を学び、自分なりの“農業観”を構築する。 ・ さらに、農を「<業>＝(なりわい)＝収入を得るための生産行為」とだけで捉えるのではなく、健全な人間生活、豊かな感性を育むための“ツール”としての側面や社会・文化・風土としての“環境”としての側面から捉えなおす。 ・ 加えて、外部の有識者による講義を交えながら、農「福」(福祉)、農「学」(教育機関)、農「景観」連携など、農業と別業種が連携する取組みについて学び、自分の生活と農との関連性を再考する。

農からの地域創生（実習）Ⅰ	
期間・規模	2018年4月～2018年9月 [春学期] ・定員50名程度
農からの地域創生（実習）Ⅱ	
期間・規模	2018年9月～2019年3月 [秋学期] ・定員50名程度
講座統括責任者	早田 幸(早稲田大学 社会科学総合学院 教授)
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・本講義は、学生が農業、農山村地域の現地に足を運んで実情を理解し、その上で地域連携や支え合いについて考えることを目的とする。 ・農を「<業>＝地域産業」という狭義の視点からではなく、園芸という社会的・文化的な“ツール”として捉え、心身の健康回復、都市農村交流などの人間関係の再生、社会と環境の関係のレジリエンス（回復・治癒）という新しい視点から、地方創生、地域連携の新たなモデルを考える。 ・上記においては、特に医療、福祉と農業の連携に焦点を当て、『農の治癒力』をテーマとする予定。

以 上